

# 裕福病 ～世界の中のアメリカと日本～

くらむぼん出版

加藤 C. 五郎  
西村和雄

はじめに

1974年の6月、私はロチェスター大学の大学院一年目を終えて、カリフォルニア州のオークランドから、チャーター機で日本に帰国した。チャーター機は、途中、ホノルルに寄って、燃料を補給した。そのとき、ホノルルの空港の待合室で、待機する乗客の中に、アメリカ人女性と日本人の男性カップルがいた。アメリカ人女性は若く美しく、一方、男性は、頭のてっぺんから足先までカーボーイ姿の奇抜な格好をしていたので、強烈な印象を持ったのを覚えている。日本からアメリカ西海岸に戻る飛行機も、そのカップルとは一緒であったが、私達が言葉を交わすことはなかった。

その年の9月、私は、ロチェスター大学経済学部大学院2年生を迎え、大学のキャンパスの中を歩いていた。すると、向こうからカーボーイ姿の日本人男性が歩いてくるではないか。驚いた私は、その男性に話しかけた。それがウ



エストバージニアの大学を卒業して、ロチェスター大学の数学科の大学院に入学した加藤五郎さんだったのである。

先のチャーター機では、加藤さんは、婚約者のクリスさんを両親と親戚に紹介するために帰国するところだったそうである。加藤五郎さんとクリスさんは、ウエストバージニア州、私はニューヨーク州のロチェスター大学、どちらも、住んでいたのは東海岸である。それにも関わらず、西海岸からのチャーター機を利用したのは、それが、「四海蜂起」という名の、中国人留学生の団体による格安のチャーター機であったからである。

それから、家族ぐるみの付き合いが始まった。とはいえ、お互い大学院生であり、私が大学院を終え、カナダの大学に就職すると、音信も途絶えてしまった。

その後、私は、日本の大学とアメリカの大学で教えることを経て、1987年4月に京都大学経済研究所に赴任した。

当時の経済研究所に、八木匡氏

(現同志社大学教授)が助手として在籍していた。八木氏が大学構内の掲示を見て、アメリカ人による英文論文の校正を頼んだところ、原稿を取りにきたアメリカ人女性のご主人が、「西村」という日本人経済学者がどこにいるか知らないか」と聞いてきた。八木氏は、「西村先生なら、うちの研究所にいます」と応えた。それが、私の加藤さんとの再会の切っ掛けである。

加藤さんは、一年間、京都大学数理解析研究所を訪問していたときであった。実は、ロチェスター大学の経済学部の大学院には、日本人留学生は何人もいた。また、他学部にも日本人はいたので、その中で、加藤さんが特に私の消息を尋ねたのは、私達がどこか、気が合うところがあつたからであろう。それから10年程経って、私は、日本の教育水準が低下していると危機感を持ち、『分数ができない大学生』という単行本を出版し、続いて、「ゆとり教育」をも批判していた。加藤さんも、アメリカで、特にカリフォルニア州の公立学校教育の

水準が低下していることに、やはり危機感を持ち、教育委員会に色々動きかけていたが、一向に改善されないのが、息子のアレックス君を「ホーム・スクール」で教育することに決心し、学校に行かせず、自宅で教育していた頃であった。私や仲間が学力の向上する教育を進めるべく、「国際教育学会」を立ち上げた時に、加藤さんは、日本の教育も同様な状況に陥っていることに驚き、学会の主旨に賛同して参加して下さった。学会の設立総会のときには、加藤さんは、「カリフォルニアの数学戦争」という題で講演をした。そのときの講演が、本書の巻末の論文として、再録されている。

加藤さんにとっては、日本は、教育もしっかりして、次世代の人材も育っているとばかり思っていただけに、日本の教育が衰退しているのには、黙っていられない気持ちがあつたのであろう。と共に、帰国するたびに、何故か感じていた、日本人の変化の原因がどこにあるのかとの思いもあつた。そんな背景から、本書の二人の対話が

始まったのである。

本書は、数学者と経済学者の、共にアメリカと日本を経験した二人の対談であるが、何が正しいとまでは言えないが、日本とアメリカの良いところと悪いところを評価する一つの視点となり得るので、はなつてほしいと思っている。

京都にて  
西村和雄

## 『裕福病』の日本とアメリカを 数学で処方する

はじめに

第1章..知を極める

- 一・一 はじめに言葉ありき
- 一・二 すべては教育から
- 一・三 天才を育てる

第2章..異文化を生きてみる

- 二・一 ニッポンを語る
- 二・二 アメリカを語る
- 二・三 外も見てみる

第3章..今を生きる

- 三・一 愛するということ
- 三・二 極めてポジティブ
- 三・三 やっぱり教育がすべて

おわりに



カリフォルニアポリテック州立大学教授

### 加藤 五郎 (かとう ごろう)

1948年愛知県刈谷市に生まれ、現在はカリフォルニアポリテクニク州立大学数学科教授。研究(出版)分野は、代数幾何学(p-進コホモロジー論)、コホモロジー代数学、量子重力(temporal topos論)。1972年に国際ロータリー財団フェローとして西バージニア大学に留学。その後、ロチェスター大学にて博士号(Ph.D. 1979年)を得て、今に至る。プリンストン高等研究所 Associated メンバー。ロータリアン(サンルイスオビスポ市ロータリークラブ)。専門分野の論文の他、著書として岩波書店出版「コホモロジーのこころ」、Springer-Verlag 出版「The Heart of Cohomology」および Taylor-Francis 出版、「Fundamentals of Algebraic Microlocal Analysis」などがある。



京都大学経済研究所・特任教授

### 西村 和雄(にしむら かずお)

1946年札幌市生まれ。1970年東京大学卒業。1976年米国のチェスター大学 Ph.D.。専攻：数理経済学、複雑系経済学。東京国立大学、ニューヨーク州立大学、南カリフォルニア大学を経て、1987年京都大学経済研究所教授に着任し、研究所長を経て現職。1997年ウィーン大学(1997年)、パリ大学(200年)などの客員教授を歴任。2006年京都大学経済研究所長となる。2000年日本経済学会会長を務める。Econometric Society Fellow(1992年)、サンタフェ研究所特任教授(2008年)に選出される。同志社大学経済学部客員教授  
著書は、『世界一かんたんな経済学入門』(講談社)、『Optimization and Chaos』(Springer)、『複雑系を超えて』(筑摩書房)、『ミクロ経済学入門(第2版)』(岩波書店)など多数。北海道札幌旭丘高等学校出身。

第1章：知を極める

一・一 はじめに言葉ありき

西村：最近、日本の小学校でも、私達の頃にはなかった英会話教育が始まりました。これには、賛否両論があるようです。

加藤：グローバル化おおいに結構、小学校英語教育おおいに結構。これまでの日本は、文化的孤立主義を選ばなかったゆえに、漢字、仏教をはじめ外来文化は、今では日本文化の根本をなしています。これは、いわゆるグローバル化のおかげです。日本という国は、美的感覚に優れ「文化消化力」が強いためか、他国から禅や茶道、碁を取り入れ、それらをアカデミールベルまで作り上げてしまふ。西洋数学、音楽もわかり。江戸前期に現れた大数学者、関孝も立派ですが、西洋数学（今は「数学」といっています）では、岡潔や佐藤幹夫など100年後の2108年になってもその業績は輝いているでし

よう。

数学においては、この2人のほかに数学者の上に「大」のつく人はたくさんいるのです。数学とか数学者のことはあとでゆっくり話すと、前向きにグローバル化、国際化を小学校から始めることが、21世紀以降に力強く生き延びるためには必要です。

西村：日本は、この30年近く、「ゆとり教育」というものが行われ、子供たちはそんなに勉強しなくなったようです。

加藤：ゆとり教育なんか、退職もしていない小中高大学生がするものではありません。ゆとり教育というものは、還暦をとくに過ぎた人がしてもいいことで、若いときからゆとり教育なんかしていたら、国がもたなくなってしまう。英語教育を小学校からしっかりとやり、自分の考えを英語でも日本語でも正確に伝えることができることが大切です。国語と質の良い文学も小学校からガッチリと教

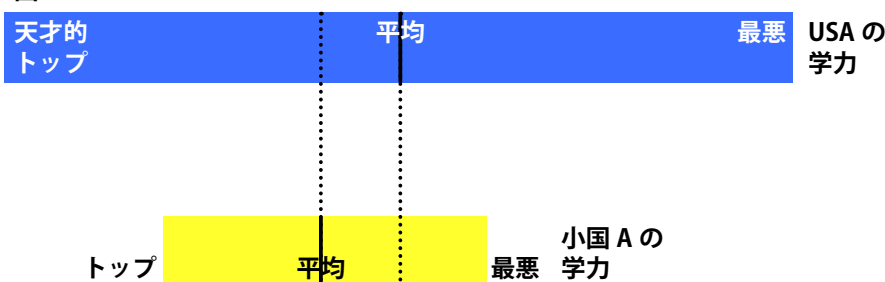
えるべきです。

西村：アメリカでは、1970年代に、学力低下に苦しんでいたようですが、州によっては、90年代までも、教育の改善が進まなかったようですね。

加藤：ここ米国でも、1990年代にソフト・マス (soft math)、すなわち数学の質を落として、楽しめるような数学に変えたことがありました。そうしたらアメリカでは、大学では成績が2.0以下が（すなわちA、B、C、D、Fの五段階中平均がC以下ということ）が2、3学期続けば退学になりますから、ソフトな数学ではダメということがわかりやすかったわけですが、聞くところによれば、日本は相変わらず、入学は大変でも、成績が下がっても退学はないという。米国は石油もある、農業もすごい、しかし平均学力は世界でも平均くらいだと思ふ。表を見て下さい。

このときは確かにUSA（米国）の平均は小国Aより低い。ちなみにこの図は、米国の収入額のグラフでもあります。米国は、人種、家族、価値観、審美観もそうですが、だいたい図1のように、左右の幅が広くなります。

図1



西村：小国Aは、日本のことですか。USAの棒グラフは、インドなどで読み替えても通じますね。

加藤：アメリカは、ある意味で国内でのグローバル化をしています。図1のUSAのトップには、日本人系でもユダヤ系でもドイツ系でもあり得るわけです。その中には、教育はアメリカに来る前に受けてきている人も多いわけです。そのようなトップの人々が米国を支えているわけです。誰でも知っている人なら、アインシュタインも米国に渡ってきたわけです。米国の今があるのはグローバル化を長い間してきたからでしょう。

西村：E2ができてから、ヨーロッパのグローバル化も一層進んでいきますね。

加藤：ここ3、4年で気がついたのですが、ヨーロッパの学会でよく私は「あなたはどこから来ましたか？」と聞くと、聞かれた方は

答えにくくなりました。一つには、

どの国で生まれ育ったかということと、一つにはどこでPh.D.（博士号のこと）を取ったかということ、そしてまた一つには、今どこの国の大学にいるかということがあり、この頃のヨーロッパではこれら三つがみな異なってきたのです。

西村：国際化することは重要なことです。国際化に備えて、日本の教育をより充実させるのが本当なのですが。

加藤：日本でもこうなったらどう感じますか。ゆとり教育を続けていたら、この世界で一国として生き抜くには、日本の大学へ訪問したら半分が外人とならざるを得ないでしょう。

西村：カリフォルニアでは、スペイン系アメリカ人が既に白人より多いですね。アジア系も多いです。アメリカが、いくらでも外国人を受け入れてゆくのは、それ自体が、新しい国だからなのでしょうね。

加藤：先ほど言ったように、超一流の「超」がつかない一流ではだ

め（この定義は難しいかも）数学者がこの米国という競争構造をもった社会で生きてゆくには、この国（アメリカ）がゆとり教育をしていてくれたからこそ、私のような外国人でも数学者として生きてこれたのです！

西村：そのアメリカ人にも、はっと思っ程、立派な人はいますね。

加藤：そうですね。「あの国はなっていない」とか「この国は優れた国だ」とか言いますが、いくらひどい国でも、立派な人はすぐ立派で、どうでもいい人との差は大きいのです。日本も例外ではありません。TVでは、多くはどうでもいい人（別に日本にいたくたつて日本はやっている。いやいやない方が日本にとってありがたいといった人）がテレビに現れる。外国の人々が日本のテレビを見て日本には、本当にひどい人間が多いと

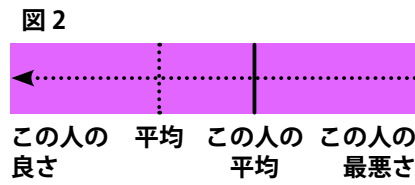
思っっては困ります。

西村：一般の人は、テレビに出る人が「有名」イコール「立派な人」であると思いがちです。

加藤：立派な人は、テレビにあまり出ない。マスコミがしっかりしていて、日本人の心を清くしてくるくらいになってほしいのですが。「立派な人」を定義するのは難しいですが、猫がねずみの定義を知らなくとも、ねずみとわかるように、私たちもどの人が偽者であり、どの人が本物かはわかるもの



です。もしも、それがわからなくなったら、そんな猫も猫としてお終いのように、人もお終いです。また、図1の右の方の人ですが、その一人一人についても図2のようなどころがあり、いい所と悪い所がそんなどうしようもない人もあり得るわけです。



西村：加藤さんは、長くアメリカで生活していて、英語の会話と日本語に会話で、どういところか最も違うと思いますか。

加藤：日本語で「あなたはたばこは吸いませんか？」と聞かれたとき、もし吸っているなら「いいえ、吸います。」すなわち「No」と答

え、もし吸っていないければ「はい、吸いませぬ」すなわち「Yes」と答えるでしょう。日本語の場合は質問した人に賛成なら「はい」、反対なら「いいえ」です。尋ねた人を中心におく答え方です。英語は答える立場中心ですから、聞かれた方に関わらず、吸わないなら「No, I don't smoke」吸つのなら「Yes, I smoke」です。

西村：確かに、この点は英語と日本語の違いでも、面白い点ですね。英語で答えるとき、相手が、「Do you...」あるいは、「Don't you...」で聞いてくると、それに合わせれば、混乱はしませんが。

加藤：しかし、アメリカでもミスをして答える人もいます。ここ米国でも英語を正しく話せたり、書いたりできる人（特に若い人たち、大学生も含めて）が減ってきています。ましてや、エレガントかつ魅力的に話せる人はほとんどいない。一つには、文法を正しく知らない人が多いのが原因でしょう

う。ちなみに、映画では「Pride and Prejudice」(BBC 2001年制作)の英語の会話は、レベルの高い英語です。それと米国でも、40年以上前はどの州でもやっていたと思うのですが、国語である英語のPhonics(フォニックス)すなわち発音、声字のレッスンをやらなくなったことにも原因があるのでしょう。息子が小学生のときに、フォニックスのプライベートなレッスンを2年くらいとったのですが、それを聞いていて、気のついたことは、英語というものはこんなに豊かなルールがあって、例外が少ないかということです。

西村：英語と日本語で文章を書いて思うのは、日本語に較べると英語の方がずっと論理的であるということです。

加藤：「ゆとり何とか」というのはどちらにしたって60、70才を過ぎた、退職した人達の人生に対する構えでしょう。若い人達には、その反対の「バリバリ教育」が向いているのだと思います。

西村：人生を経験した後の大人が、

育にして正道で伝統的なガッチリとした教育に戻れば、正しく話しかつ書くことができ、味のある会話のできる人も増えましょう。ソフト数学(soft math)やソフト英語(日本では「ゆとり教育」のことですが)を、社会が受け入れてゆくのは一つの「裕福病」なのかもしれません。こうして、裕福な国が衰え、貧しい国がハード教育で立ち上がってくるというのが歴史なのかもしれません。

西村：裕福な国になったのは、多くの先人の努力のおかげなのですが、それを自分の力だと勘違いする人が「ゆとり」を他人に押し付け始めるのでしょうか。

加藤：「ゆとり何とか」というのはどちらにしたって60、70才を過ぎた、退職した人達の人生に対する構えでしょう。若い人達には、その反対の「バリバリ教育」が向いているのだと思います。

西村：人生を経験した後の大人が、

これから人生を経験しようとする子供に対して、予め、自分の反省点をふまえて何かを子供に押し付けることが、そもそも無理なのだと思います。

加藤：もつとも、自己満足している若者もおろかですが、自己満足していない年配者もさみしいものです。男性なら、正しい美しい国語（英語でも日本語でも）が話せ、会話の内容がわくわくするようなものであり、女性から「あなたと話していると、青春が戻ってきたような気がいたします」なんて言われてみたいでしょう。私ならそう思う。

西村：現在の日本の文化人の中には、英語は国語を身につけてから学ばないと、日本人としての基礎ができないという人が多くいます。加藤さんは、これについてはどう思いますか。

加藤：ヨーロッパでは、小学校一年で英語を教えている国にスウェ

ーデンがあります。ヨーロッパの国々で英語のうまい、すなわち発音も正しく、自由に自己表現できるのは北欧のスウェーデンとノルウェー、そしてデンマークも入るでしょう。しかし、北欧の私の友や出会った人々は、アイデンティティ (identity) をしっかり持ち、スウェーデン人ならスウェーデン人としての考えを一人一人持っているようです。スウェーデンの人は、自国のことを良く知っていて、スウェーデン人であることを幸いと思っているように思われます。小学校で英語を始めて、スウェーデン人であるということは、少しもぐらついているように見えません。

西村：それは、そうですね。

加藤：逆に小学校で（21世紀の国際語の）英語を学び始めて、自分のアイデンティティがぐらつくようでは、他に何かもっと深刻な問題があるのでしょうか。19世紀以前のヨーロッパでは、ラテ

ン語やギリシャ語が今の英語よりも幅をきかせていました。しかし、例えば、数学者のオイラー、そしてニュートンやライプニッツが、ローマ（イタリア）やギリシャに心を奪われていたとは思われません。そのときそのときで国際語がラテン語であったりドイツ語になったり、英語になったりするわけです。100年後には、中国語が今の英語に取って代わるかもしれないし、もし、運がよければ日本語になるかもしれません。

表現手段としての言葉が自由に正しく使えないのは、一つのハンデイとなりかねません。そんな時に、英語にしても数学にしても文学、芸術にしても前向きに立ち向かう必要があります。ゆとり教育なんかしているときではないと思っ。日本には、石油はゼロに近いし、鉄鉱もあまりない（セメントはあるらしい）。日本の一番豊かな自然資源とは、日本人の持つDNA、すなわち日本人の脳ではないでしょうか。ではこの優れたDNAを、どのように栽培し、どのように収

穫したらよいのかそれが問題です。日本のように、いわゆるnationのもともとの定義に近い国は、少なくなってきたと思います。日本の最大自然資源でありましょうDNAから大いに収穫し、日本の科学、文学、経済、芸術・・・をしっかりとしたものにするには、しっかりとした教育が、その基礎でしょう。

西村：たしかに、小学校から高校までの教育が基礎です。その中でも、「読み・書き・そろばん」と言われるように、算数・数学と国語力が基礎となります。

教科の中には、基礎科目があり、その基礎科目の中にも、その後の学習の基礎になるものがあります。そのことをふまえた上で、応用力・開発力をつけることで、国としての科学・技術・文化があるのですから。

加藤：今世紀の国際語である英語は、遅くとも小学1年から始めるのも大いに結構なことでしょう。

言葉（何語でも）なんてものは、小さいときに始めた方が後で苦労しないですみます。国際化は、これからも加速していくことでしょから、鎖国の真似事なんかをこの世紀にしていたら、後で取り返しつかないようなことになってしまいうでしょう。国際化は、豪快にかつ積極的に進めるべきでしょう。そうでもしなければ、世界の競争に勝って進めないと思うのですが、どう思われますか。

西村：英語といっても、外国語としての英語については、小学校あるいは小学校入学前には、徹底して、「聞くこと」、「話すこと」です。英語で遊んで慣れることです。決して、英語を勉強することではありません。

ところが、それを誤解して、日本人の小学校の先生が生徒に教えるために英語の発音を勉強したりしています。日本人の先生が英語を教えるくらいなら、ネイティブによるビデオを生徒に見せた方がよいです。

小学校で、ネイティブの発音を聴き、それに近い発音を覚えると、中学では、会話ではなく、英語の論理的な文章を読むことが必要です。

ところが、今の日本の教育では、中学三年間、学校で会話を学習します。会話を中学で学ぶのは、もう遅すぎます。通常の文章を読まず、文法も習わないので、高校に入学した時点では、主語と述語の区別もつかなくなっているのが現状なのです。

小学校では英会話を遊び、中学からは英語の文章を読む、これは日本語の力をつけることにも役立ち、算数・数学の学習とともに、論理力と読解力をつけることにながらると思います。残念なことは、そのことに気づいていない日本人が多いのです。日本語だと、文法は知らなくても、誤った使い方には、何となく不自然な感じを受けます。これは、母国語特有に持てる感覚なのでしょう。

加藤：英語でも、母国語は mother tongue ですから、「母の舌」ということです。国際結婚でも、赤ちゃんも母親の話す言葉をまず覚えるといふ説は聞いたことがあります。

ですが、大体そのようです。しかし、日本人生まれの日本夫婦でも、子供の前では日本語を使わずに育てたという人に会ったことがあります。もったいないことだと思いましたが、アメリカで生まれた子は、親が家でいくら別の言葉を話していても、英語は自然に完璧にマスターできるものです、小中高と学校さえ行けば。社会とは、そのくらいパワーのあるものです。ノルウェーから来たセルバグ教授（数学者）の話では、奥さんと2人が友達と話していた子供にノルウェー語で話しかけたところ、「二度と自分の友だちのいる前で、ノルウェー語を使わないで欲しい」と強く言われたそうです。おもしろいことに、今では、この子の子供すなわち孫は、おじいさん（セルバグ教授）にノルウェー語を学びたくてしょうがないということだ

す。子育ての難しさ！

西村：外国で暮らした子供が、日本に帰ってから、一切、外国語を話したがるなくなる人が多いのです。外国語を話すと、友人にいいられるのでしょね。

加藤：私は2008年の6月で36年米国で暮らしたことになりますが、話す方は大丈夫です。母国語を忘れることは、よほど頭の悪い人だと思いましたが、それだけではない、どうやらそれは語学的センスがあるかないからしい。と言いますのは、母国語がうまく話せなくなつた人は、英語も下手なのです。母国語を30年、40年経つても、しっかり話せる人の英語はしっかりしたものなのです。日本人でありながら、日本語がしっかり話せなかつたり、書けなくなつたりすることは、私にとつては、日本人として誠に惨めなことのよう思われます。英語に、If you don't use it, you will lose it 使わなかつたら失くしてしまつ（）という諺がありま



す。そこで、1972年以来、日記は日本語で付けています。それでも今、書いている自分の文章を読んでも、何か少し変な感じがします。そして毎日使わないことの怖さが少し分かったような気がいたします。毎日やるか、やらないかは語学のみならず他の分野でも言えることなのかもしれせん。

西村：文法のようにルール化されないニュアンスは、子供のうちに学ばないと身につけません。日常的に話していないと、そのニュアンスが分からなくなるのでしょね。

加藤：話す方は大丈夫と言いましたが、ある意味で正しい日本語でありすぎて、一度日本に帰国中に飲み屋で、「お客さん、明治の人のように話しますねえ」と言われたことを思い出しました。逆に、ここ36年以内に、日本にいる日本人の話し方が、大きく変わったことが一つあることに気がついてます。

説明しにくいし、実演も難しいのですが、人の賛成を促すような話をされる人が多くなったということとです。日本にずっといたら、この変化には気がつくことが難しいのかもしれませんが、私には、それが1972年以後に現れた日本語の新しい話し方と分かります。

これは、英語でも変化は同じことで、3、40年ぶりにアメリカに戻ったという人も、「はやり言葉」や「スラング」はよく変わるし（私がここに来てからも、いろんなスラングが現れて、消えていきました）、気をつけないと自分の母国語が英語でも、特に若い人と気さくに話している、30%くらいがスラングの表現であったりして、理解しにくくなることもあります。

西村：加藤さんの日本語も表情も、若い時と比べると、少しアメリカなまりとでもいうものが入っているように感じます。それとも、加藤さんは変わっていませんが、今の日本人や私が変わったのでしょうか。

加藤：社会が人の顔を変えると云いたくなるほど、時代が変わり、そして社会が変わり人の顔もただの流行を超えたところまで変わるように思われます。と、言いましても、そんなに早くDNAの構造が変わるわけでもありませんから、骨は変わらなくても顔の肉が動くより変わりようがありません。カメレオンはハダの色を周りの色によつて変えることができるように、人も社会から出ているその時代の社会向きの顔に近づける能力があるのでしょ。化粧とかはやりのヘアスタイルとか表面的変化を言っているではありません。

幕末とか明治時代の人の顔は、20世紀の日本人とだいぶ何か根本的な違いがあるように見えます。体の構え方、姿勢も、食べる物も、人生の豊かさも大いに異なります。考えることも、考える方法も異なるのでしょ。人種が同じなら、

国々の独特の顔つきは、その国の社会によつて5割くらいは決まってくると言いたくなってしまします。日本人だって、4分の3くらい

いは、ちょんまげが似合うようないわゆる典型的な日本人のような顔をしています。あとの4分の1は、見るから韓国的な顔であったり、ベトナム的、インドネシア的、モンゴルの、南太平洋の島々の顔です。

私のように、時々日本に帰って、日本人の顔を拝見させてもらう者には、ここ30年、40年の間に、日本人のはやりの顔は、北方型アジア人の顔から南方型アジア人の顔に変わってきているように見えます。これは、あくまでも日々、白人・ヨーロッパ系の顔を見て生活している者の目には、そう感じるということ。この見解が、当たっていたら興味のあることだし、間違っていたら、どうして私の目にそのように日本人の顔が見えるのか、その理由を探すのも興味があります。

西村：はやりの顔は確かに変わっています。昔の映画スターと今の人気タレントでは、骨格、顔のタイプも違いますからね。

加藤…どうしてこんな話題を始めたのかといいますと、アメリカの日系二世の顔がすでに、日系一世、すなわち日本からアメリカに渡って来た日本人の顔と何か本質的に異なるのを感じたからです。それと、日系でも中国系でもアジア系の二世以降は、みんな共通分母を取ったような顔つきになるといことです。これは、フランス系、ドイツ系、ポーランド系…のヨーロッパ系でも似たようなことが言えるでしょう。デンマーク生まれの米国に住む友達が言っていました。「うちの娘がいくら自分がデンマーク人と思っても、デンマーク人のことは、まったくわかっていない。」私の息子がいくら柔道が好きでも、そして、黒澤明の映画がいくら好きでも、日本人ということとは、まったくと言っていいほど解っていないのでしよう。日系二世も、その点チンプンカンプンだと思えます。話にはよく聞かぬが、実感というものが伴わないと言っているんじゃないか。

日系アメリカ人の顔の筋肉は、緊張しておらず、リラックスしているように私には見えます。「切腹して国は豊かになる」という切羽詰まるという緊張感がないどころか、日系アメリカ人は、そんなものがまったく欠けているような雰囲気です。

西村…ハワイやカリフォルニアでは、日系のアメリカ人が多いですが、日本人とは違う雰囲気がありますね。

加藤…そういう本家本元の日本も、裕福病で、切羽詰るような厳しい姿勢の人も減ってきているのでしようか。私も、一応、日系一世です。私、もう少し話しますと、この露骨な競争社会であるアメリカで、生活してゆくには、3本立ての、「憧れ」「切羽詰り」「夢中」を、お手玉、いやジャグリング (Juggling) でやってきたようなものです。しかし、50歳代になってからは、「悠々と」といった感じよりは、「伸び伸びと」「やっぴる思いです。」

西村…加藤さんは、数学を研究するときは、日本語と英語のどちらで考えていますか。

加藤…この30年間、アメリカで応数学 (今は少し物理も) をやってきているのですが、数学を考えている時は、主に英語で考えていることに気がつきました。それは、私の数学は95%以上は、米国に来てから学んだり考えたりしたのです。二十才代のおわりころ、小学三年のときおぼえた九九を英語で覚えなおしたことがあります。英語に切り変えそうとしたとき、6の行とか8の行がおかしくなると、今でも少しあやしいときがあるようになってしまいました。私たちが (数学でメシをたべている人々) の数学は、いわゆる数、1、2、3…はあまり使わないので、小学でマスターした九九が、ふり出しにもどったとは言わないまでも、少しおかしくなってしまうました。

西村…さきほど言いましたように、数学研究のときは、英語で考えるのですが、うまくいかないとき (そんな時が多すぎるのですが、人生はそんなものでしょうか?) は、日本語で考えてみると、うまくゆくことがあるのです。それが不思議です。ほとんどの人は、ものを考えるとき、その人の最も得意な言葉で考えているのでしようが、私の場合、英語のほうが得意言語とは、一概に言えない。ある分野というか、数学以外のより文学的な思考は、日本語の方が主でしょう。日記もここ30年以上、日本語で書いています (36年前、日本を出たとき以来、英語で日記を書くのをやめました)。それは、日記には、日本語の方が何かしっくりするというところもありますから。言葉を変えておなじことを考えたら新しく見えてくる場所が出てきたりするわけです。この言葉の持つ力は、思っていたよりもあるらしい。言葉を変えると思考のパターンも変わってくるらしい。

西村：異なる言葉だけでなく、異なる観点から見ることで、理解が深まるということがありますね。だから、広く学ぶことが重要なのだと思います。

それはそれとして、英語は、数学、経済学に限らず学問では世界共通語になっていきますので、英語が流暢でないと、悲しいことに軽く見られがちです。

加藤：アメリカ南部生まれ育ちの名のある数学者がいました。その人の講演をしばらく聞いてみるとアメリカ南部なまりの英語にもなれ、その内容は深いものと気づくのですが、しかし初めは、日本語でいったら東北弁か鹿児島弁で聞いているようで、とてもたいしたことはいっていないだろうと思ってしまう。だから日本では、すまして話すときは、みんな標準語で話すのでしょうか。聞くところによれば（読んだところによれば）19世紀と20世紀の境い目の前後に大活躍していたドイツ出身の大数学

者ヒルベルトも、地方訛りが強かったということですね。おもしろいことに、私がお会いしたアメリカで活躍しておられる外国生まれの一流の数学者の英語は、だいぶ発音がひどかった。それは逆にたいしたものですね。英語がへたでも一流大学の看板教授なのですから。大学者なら、英語がへたな方がかえって値打ちが上がるくらいです。人の心理とこの社会はおもしろいものです。

西村：大学者は別で、通常は、同じ実力なら、英語が上手の方が、いろんな意味で、有利です。

加藤：これで思い出しましたが、アメリカ流に大変に太っている女性の友だちが言うには、「私みたいに太っているとこの社会では軽く見られますよ。」私がこの人と知り合う前に、息子の小学校のPTAの集会にいったことがあるのですが、この女性が「ソフト教育はよくない・・・」と父兄として会場の片隅から意見を言い始めたので

す。私は、「あのデブッチョのオバさんに何が・・・」とは思いませんでしたが、あの南部訛りの数学者のときのように、しばらくしてから「この人の話しには、大切なところがあるなあ」と思い改めたことがありました。この二つのケースで学ぶことは、一つ、人の話しはていねいに最後まで聞かないといけない。もう一つは、私たちが多くの人には、偏見というものがあり、表面的第一印象で人を判断しがちであるということでしょう。

又、言葉もきれいに話せ、スタイルも良ければ、こういったナンセンスを通しすごさなくても自己表現はしやすいということでしょうか。しかし、あんまりきれいすぎても逆効果があるということも、スタイルの大変良い美人から聞いております。「智に働けば角が立つ。情に棹されば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。」と明治時代の夏目漱石が書いているのですから今もおなじか・・・。

西村：家柄、話し方や見た目が良いと、得をすと思えます。ただ、それだけですと、身近な人や同じ分野の人には、底が知れてしまいます。しかし、そういう人が、結構、日本では有名になり、影響力を持っていることがあります。

続く